

フェイスアナライザー



開発者 : 故保母須弥也先生 (前奥羽大学学長)

宮本容正先生 (京都市開業)

細山愷先生 (新潟県開業)

製造 : 株式会社シオダ

ご注意 : 瞳孔線情報記録機能の有効性をご紹介するため、
患者様方には本サイトで目を隠さないことをご了承頂いております。

フェイスアナライザーとは

旺盛な研究と著しい医療機器の開発により、歯科医療は疾病の安全的機能的な要求度を十分に満たせる迄に進展して来ています。患者さんは審美的回復も歯科治療の範疇として要求されますから、それに対応できる手技と機器の必要性が求められます。

口腔の審美修復治療をして行く場合には、その基準点が必要になりますが、フェイスアナライザーはトランスバース・ホリゾンタル・アキシスや水平基準面のような運動学的な情報とともに、顔面の正中や両瞳孔線の審美的な情報を記録再現する事を目的としています。この機器で今迄技工サイドに伝達できなかった患者顔面の審美的情報が全て技工サイドに容易に伝達でき、術者、技工担当と患者の共通認識が容易に得られる様になりました。

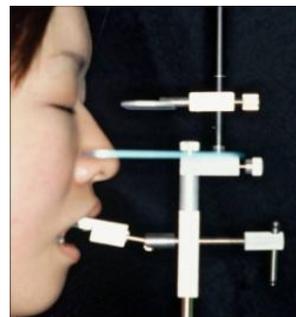
それでは臨床例を提示して簡単にフェイスアナライザーを解説しましょう。



ゼロホビー咬合器



フェイスアナライザー



顔面取り付け



咬合器への固着

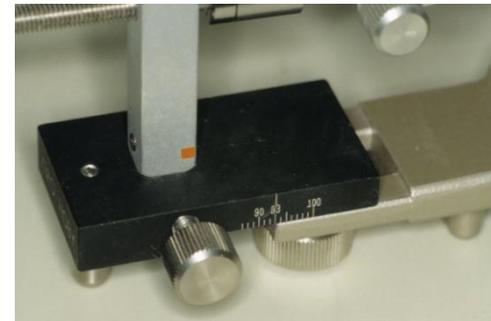
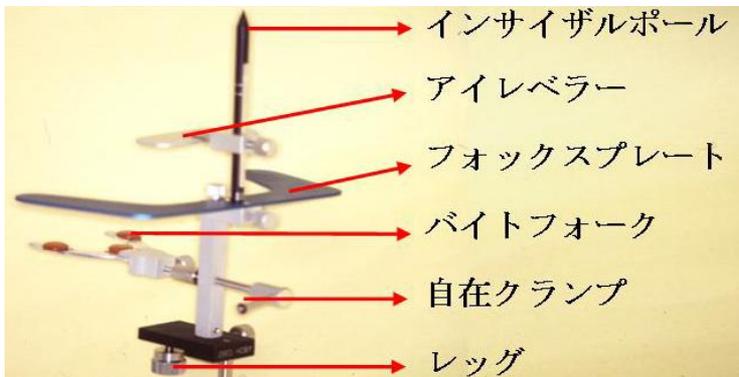
フェイスアナライザーの臨床応用

(審美治療、歯周外科治療、再生治療、矯正治療)

フェイスアナライザーはバイトフォーク、フォックス・プレート、正中ポール、アイレベラー、固定用ジグ、から構成されています。

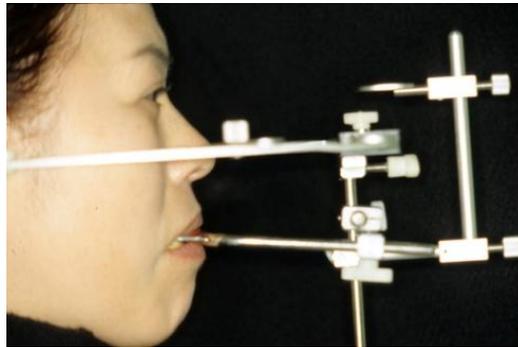
フェイス・アナライザーは全機種 of ホビー咬合器に装着可能ですが、機種によりインサイザル・テーブル取り付け部のスペックが異なりますので、専用の固定用ジグが必要となります。

この操作で作業模型を咬合器にマウントします。



前歯部の審美的修復治療への適応

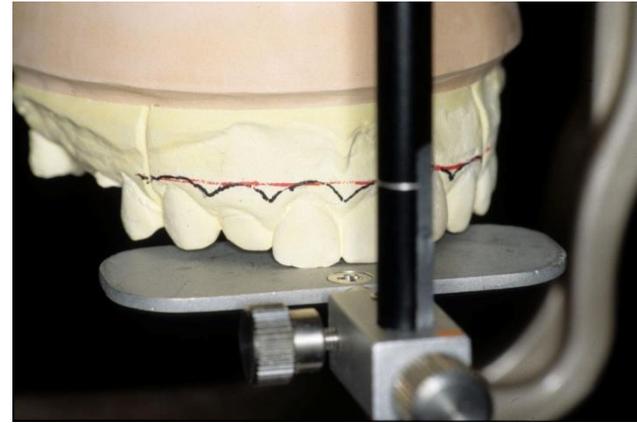
(前歯部の切端位置の基準点が無いケースでは、
フェイスアナライザーによる両瞳孔線の記録を技工・臨床で用いることができます)



歯周外科用サージカル・プレートを作成して

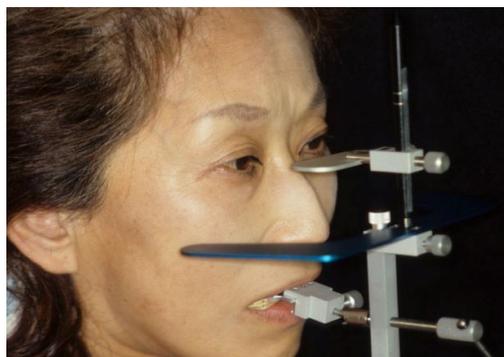
歯肉歯槽審美外科処置を行う場合の骨切除域決定への適応

(審美的回復治療をするケースでは、歯肉、歯槽整形の為、外科的切除をする基準線を咬合平面及び両瞳孔線に求める際、フェイスアナライザーを用いる事で基準を備えた審美外科手術が可能になります)



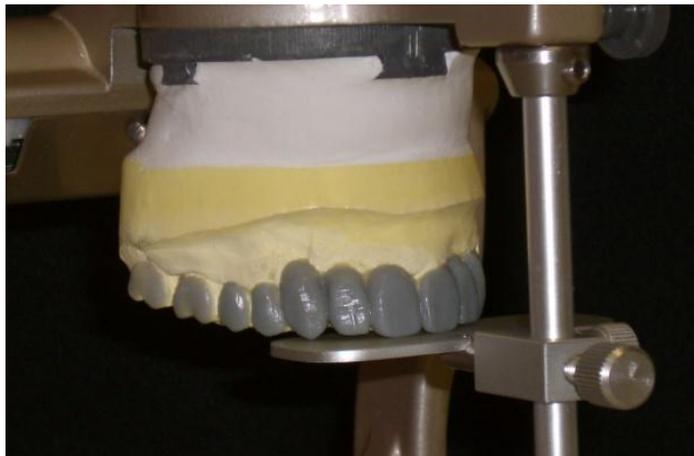
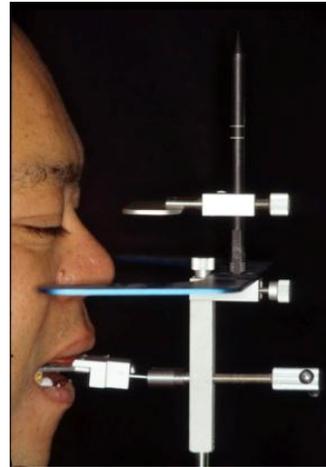
再生治療時の骨造成量と位置決定の為の適応

(前歯部の極度の骨吸収に移植骨で骨造成をするケースでは、
受容側に必要な骨レベルと骨量を決定するに際し、フェイスナライザーを使用します)



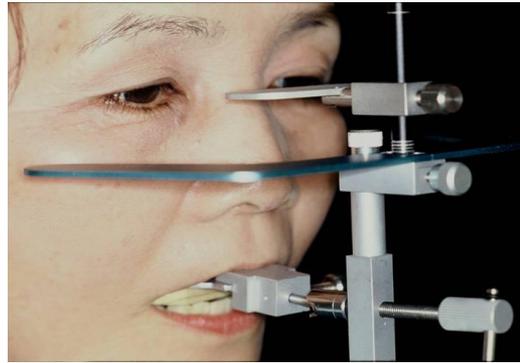
矯正治療時の歯牙移動の最終位置決定への適応

(モップアップモデルの歯牙位置を審美的に決定するケースでは、フェイスアナライザーにより切端位置を科学的に求める事ができます)



この様に、フェイスアナライザーは多様な症例を的確に解決する事が可能となり、咬合機能を配慮した審美治療やインプラント補綴を行う上で、咬合器上に運動学的な情報と審美的な情報を再現する事は不可欠であり、フェイスアナライザーはこの新時代のニーズにかなっている機器であります。

(当症例は、顎運動情報も審美情報も完全に消失し回復治療をする為の基準点が全く無い為、フェイスアナライザーを使用して失われた患者さんのデータと治療基準点を得る事で容易に回復治療が可能になりました)



SHIODA
DENTAL COMPANY

The manufacturer of **JAPAN**

ISO 13485
BUREAU VERITAS
Certification

